

20 北里柴三郎口述中川愛咲編纂「伝染病

研究講義」の内容及びインフルエンザ菌の発見について

○会¹⁾ 田 恵・田口 文章

北里柴三郎博士(以下「北里」)は東京大学医学部を明治十六年(一八八三)卒業、三年後明治十八年十一月より明治二十五年(一八九二)五月まで主にコッホの研究室に滞在し、研究に従事した時代は近代微生物学の黎明期であった事、そして北里の帰国後の伝染病研究所の設立により門下生に細菌学者輩出し、本邦の細菌学が飛躍的に発展した事はよく知られ、また認められている所である。

ところで、明治期刊行の細菌学書は明治十九年に始まり未だ微々たるもので、北里著宇都宮綱條編纂『細菌学研究』明治二十六年(二八九三)があるが、ドイツで発表した論文をまとめたものである。

明治二十七年(一八九四)三月より細菌学及び伝染病学の普及を目的に研究生制度を発足させ、研究生を全国よ

り募り明治二十七年四月には第一回生六名を受け入れ、一期三ヵ月で講義と実習の講習会を開催している。その講習会での北里の講義を中川愛咲が記録したものが、北里柴三郎口述の伝染病講義第一巻(以下「本書」)である。本書を演者は所持しているが、第二巻以後は文献的にもその出版は不明である。

本書内容であるが最初より各論となっており次の各章になっている。

- 第一章 脾脱疽菌
- 第二章 悪性水腫菌
- 第三章 ラウシユブラント菌(鳴疽菌)
- 第四章 破傷風菌
- 第五章 印度虎列刺菌
- 第六章 再帰熱螺旋菌
- 第七章 インフルエンザ菌

それぞれの各章は概論・所在・形態・芽胞・固有運動・染色法・大気の要否・温度及び発育・人口培養・理化学的作用・対スル抵抗力・産生物・動物試験・鑑別・免疫・毒力試験・予防・伝播・消毒など多岐にわたり詳細に述

べられ一二〇頁になる。

巻末には写真図が十六表まで計七十二枚の自然大、百倍、五百倍、千倍の染色標本、聚落、血液、組織標本などが示されている。この中には本書の内容に含まれていないメチニコフ菌、エルベ河湾曲菌の写真も出ている。

ここで第七章「インフルエンザ菌」の第一項の「概論、発見ノ次第」についてであるが、この項は次の通りの記載となっている（一部のみ）。

然ルニ千八百九十二年ニ至リ始メテ本菌ノ「グリスリン」寒天培養基ニ発育スル事ヲ確定シタリ（北里・獨逸醫事週報九十二年一月）
帰其純粹培養ヲ獲ル方法ハ結核菌培養法（咯痰ヨリ純粹培養ヲ獲ル法）ニ於テ之ヲ詳述セン。又爾後プファイエル氏ハ血液ヲ寒天斜面培養基ニ塗布シ以テ本菌ノ培養ヲ得タルナリ

右に示してある Deutsche Medizinische Wochenschrift vol. 18 No. 2 p. 28 にはインフルエンザ病原体治療の一報として Vorlaufige Mittheilungen über die Erreger der Influenza の表題で伝染病研究所研究部門長 Dr. Pfeiffer による寄稿が出ていて、すぐ続いて Dr.

S. Kitasato の名前と Ueber den Influenzabazillus und sein Cultur verfahren としてインフルエンザ菌の純粹培養に成功した事が報告されているのである。因みにこの発表の一八九二年五月に北里は帰国している。インフルエンザ菌の発見は R. Pfeiffer と S. Kitasato 両者によるものと主張するものである。

本書は北里がドイツより帰国後二年で行なつた講義であるので、近代病原細菌学の創始者ローベルト・コッホに学んできた当時では最新の内容となっており、研究者も随所に紹介しており、北里の発見（一八八九）である鳴痘菌、破傷風菌の嫌気性人工培養の記載もされている。特にこの内容の中のインフルエンザ菌の項で北里が人工培養に成功した記載に注目し、原著の論文の調査を行なつたものである。

（1）柏崎市・会田医院

（2）北里大学衛生学部微生物学教室